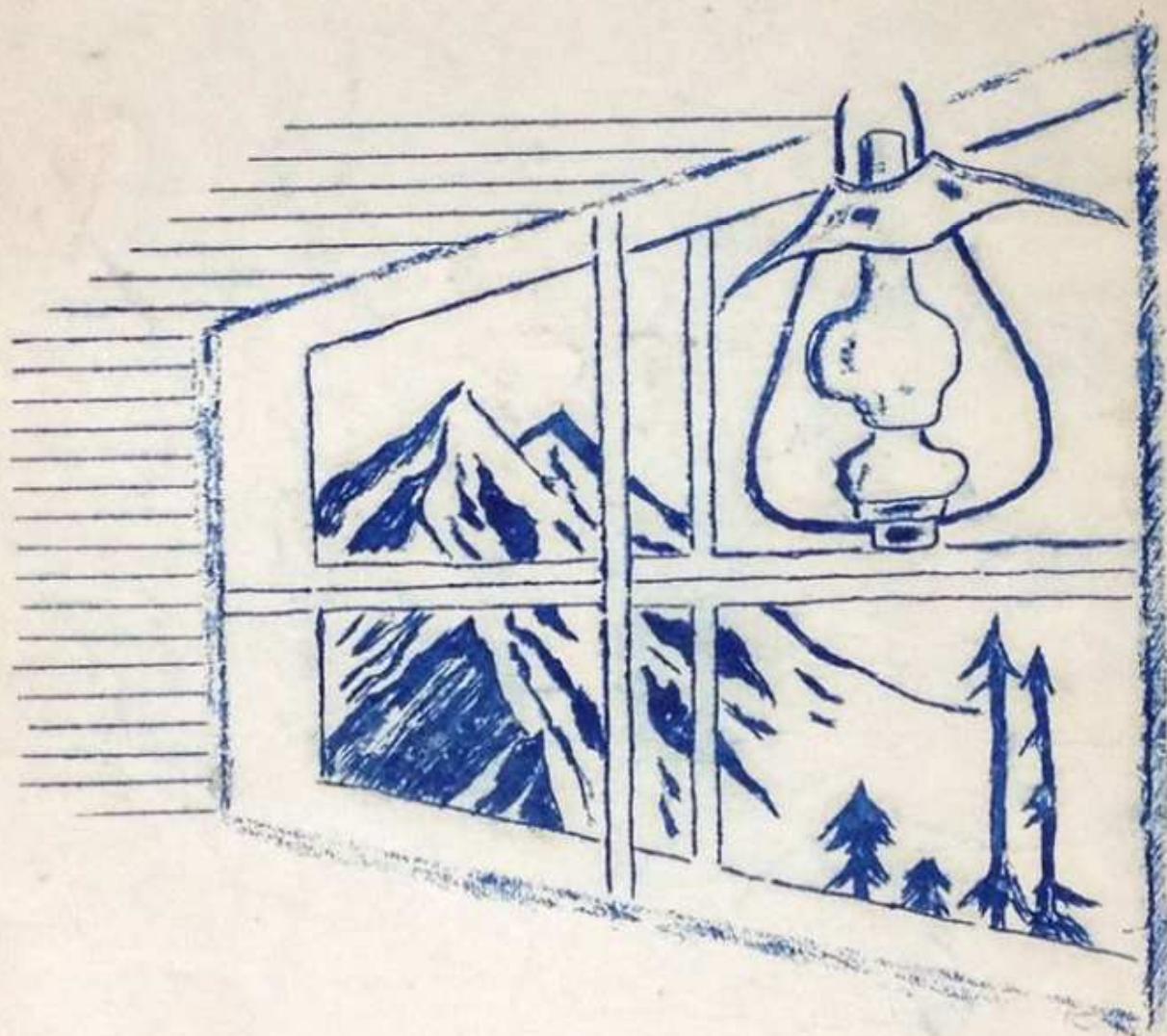


溪棧



No. 3 MAY. 1957

渓 梢

一九三号



登山の本領は、頂上を極める
ことにあるのではなく、困難
に打勝つためにいかによく耐
つたかにある。

| マンメリ |

辻藏書

上信の大峰沼吾妻耶山へ (4)	渓棱
-----筒井道栄	- 3号 -
丹沢主脈縦走 ----- 田中莞二(6)	
西丹沢・中川川渓谷 (10~17)	
寒沢 ----- 山縣昌彦	
湯ノ沢 ----- 辻勝四郎	
箱根屋沢 ----- //	



〈目次〉

谷川岳春期合宿

一の倉一の沢 ----- 村田俊満 (24)
一の倉南稜 ----- 山縣昌彦 (26)
谷川岳-蓬峰縦走 ----- 斎藤良則 (28)
剛毅たり我が仲間 ----- 山縣昌彦 (30)
音楽慢歩 (3) ----- 吉田泰彦 (20)
山と動物 (1) ----- K.T (22)
山岳書紹介 (1) ----- M.Y (18)
山の料理 (2) ----- 近藤澄江 (32)
仲間を語る (2) ----- 吉田泰彦 (31)
最後の山登り ----- 鳥本健次 (33)
会務報告 ----- (19)
仁人山行略報 ----- (31)
編集後記 ----- (35)
扉カット ----- 北岳



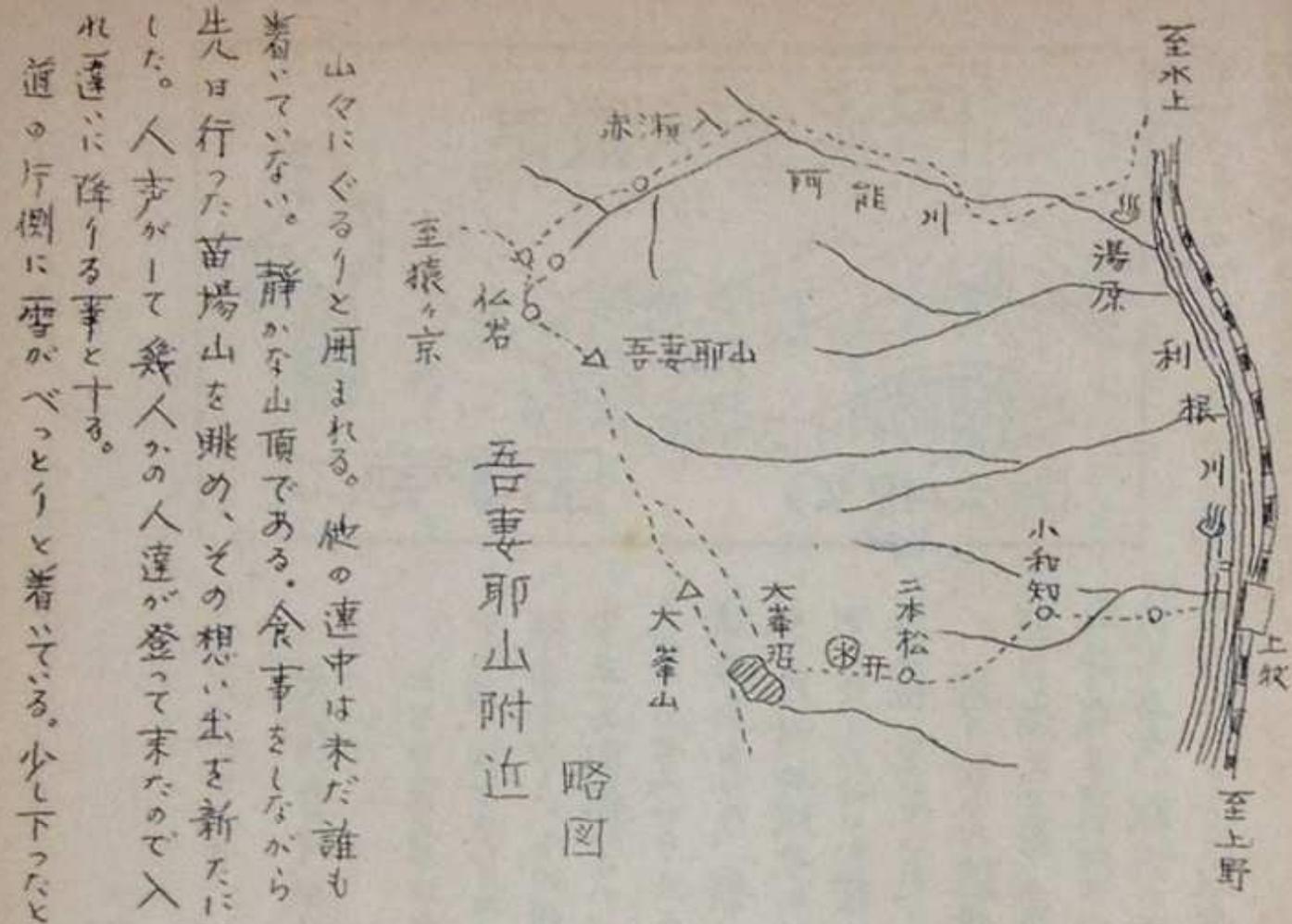
春を終つて

集中登山、西丹沢、谷川合宿と日程を終るうちにいつの間にか山の緑もその色を増して春も終りを告げる時が来た。間もなく我々は長々陰鬱な雨期を迎える。しかしそれは我々にとって自然が与えてくれる大事な休息の時期である。

その雨雲の切れる時、我々は紺碧の空のもとに岩と雪のコントラストが描く、あのダイナミックな躍動の夏を迎えるのだ。

“夏よ早く来”と念じながら、この時期に我々ははやる闘志を内に密めて、思索にふけり、計画を練り、そして不斷の研究を続けながら来る夏に備えてより有意義な日々を送ろうではなか!!

K.T



略図

五ヶ妻耶山附近

ころで見ると谷川の山と顔を突き合はせて、いろいろな
もんだ。下りはひよどり越えの脅尾根であるが、両
側は石楠花の大群落末だ開花に早めが惜しい。
こぶーの花が眞白を清純な姿を夏せる。名も知りな
い幾輪かの花を本の向にはさながらくと奇形を併
岩による。一寸登りたくなつたが、水上から木々人達が
居たのでオランバはやめてそのまま行く。少し行くと猿
ヶ京から後園に行く道と分かる。右に水上の道をとる。
やがて阿能川の水音が聞える。時向がなづかくあるの
でお茶をかし、ストーブを作りゆっくり食事をする。
二時水上着。一旦呂浴びた。ところが車仆な山
の湯とちがい温泉町の駅に弱い心臓はそのまま
三時汽車で帰路についた。
いつもながらの静かな山あるのであった。

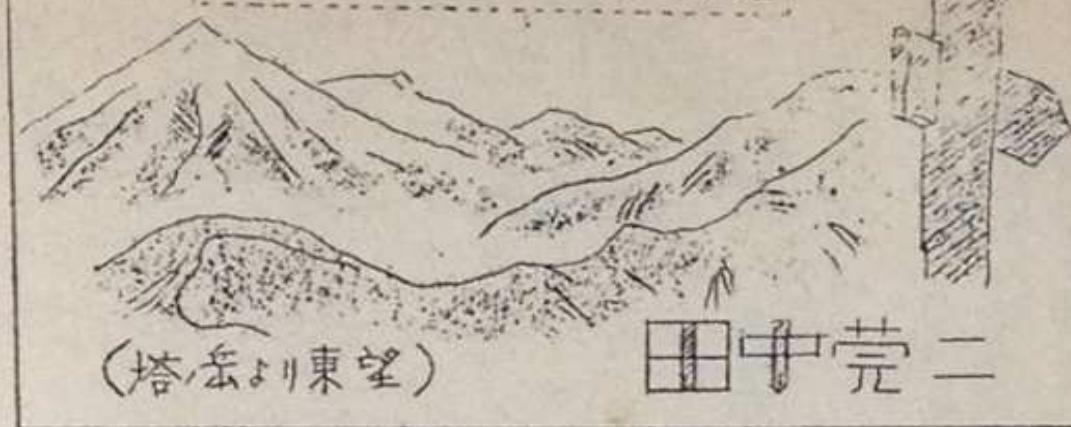
(費用 水上—北浦和片道 三四〇円)

山々にぐるりと囲まれる。他の連中は未だ誰も
着いていない。静かな山頂である。食事をしながら
先日行った苗場山を眺め、その想い出を新たに
した。人声がして幾人かの人達が登って来たので入
れ違ふに降りる事とする。
道の傍側に雪がべつとりと着て居る。少し下つたと

コースタイム

大宮	発着	発着	0、4、4、5、6、6、7、7、8、9、10、1、2、3、6、	24、30、45、50、40、40、40、25、40、00、00、30
上牧	シ	松		
二木	木	木		
大峯	大	峯		
鳥居	居	居		
今岐	岐	岐		
吾妻	山	山		
木	木	木		
阿能	阿能	阿能		
木	木	木		
大	大	大		

丹沢主脈縦走



日時 五月三日

メンバー

大武、吉田、田中

二日の東京は午后
から雨、三日もそれに

準するうし、との予報

で立つて関係から、メ

ンバーも七人から三人に
減つてしまつた。新宿

発着時丹沢号も両
が災いしたせいか横に余
れる位空そぞいた。

降り立つた淀沢の
空は満天の星。完全

に予報を裏切つた現

つて東之る。一直線の登りも登向全ら一汗かくところだが、有難いことに吹き上りて来る海からの風は涼しいとは言ふ。立ちどまれば寒さが身にしみる位だ。小生薄着の上に強風と寢不足で少々気分を悪ろくしたが、やがて鎌倉山稜の縦走路の今岐矣。草山の花立に着く。

髪の毛が逆立つふと思われたのに強風に進む車を余儀なくされ一気に塔ヶ岳の小屋にかけ込む。財に四時三十分。

ただちに革紐を朝食のにぎり飯をほきばる。五月とは思ひぬ程の寒さに音がカタ／＼鳴る。山の夜明けは早い。小屋の内はうららかな朝の光が横よに流れ来てまた快晴だ。これからの縦走路の状況が保証されたわけだ。時間は充分あるが、早々に小屋を出る。

外の南西からの風はつめた、が厭々として山をわたる新緑の大気は爽やかだ。足をはさみ毎にサク／＼と竹林がくすれる。淡い緑の伊豆蘿連山を伏えてタベの

車へばおひつかけ零時半寝中電灯をたよりに大倉の
部落を下り大倉尾根へ向う。

二つはハク超すと未だ枯草に覆われた龍が馬場を手
を木ノリットト入れたまま直進し縦走路最初の登り
井沢山のゆるハスロードに辿る事二十五分で山頂に着
く。星没したところ灌木に視界をささえられた草原
は余りなく多い。偶に建築中の小屋から立ち登る朝
煙を少しおがら三峯絶支路の右に見て径を左にと
ると、すぐに下りニ三十メートルも続き一旦平坦地を立、六
米を行った後で樹林の中に入る。鈎瓶落しの名づく
さやし、意を取つ下りがひがえてくる。道からのコース
をうねりアーバイトを要するかも知れない。

秋のススキを思ひせるような、それが鈎竹であろうか

斜の近くまで覆ふがさつてゐる。これを林のけながら
下り切るとすぐにゆうやかな草原状の登りがニ三十
メートル続く。アナ・唐松等の密木樹林の間に足
を踏み入れ呼吸のテンポが早くなり始める頃不動峯
に着く。

右手下方、早戸川からの三本の沢の下である。

そのうち一本が後方丹沢山のふところに吸い込まれて
いるのが大淀沢か。一方左手富士をひかえて大
な眺望の伏角四十五度には玄倉川の広い河原

のまゝにぐつと山腹を迂回して、ミ不動の峯
左右に入り込んでゐる。

三週間前のユーシンでの合宿テントはあつ邊では
立かつたかしらと吉田の指す方向に相槌を打つ。こ
れから道は雨び樹林の中を通り一つの隆起を越し
たところに二枚ともある位の岩の突起が右手をふく
ひでいる。これが鬼ヶ岩と称するものらしい。鬼とは又
大袈裟に言つたまゝだ。明る、日射しを一杯に受け
下に続く三、四メートル岩場（岩場程のものではない）を
き階段に見下さればどこでも見られる林り少々荒
削りの石碑と言うところ。

さてその岩の脇を出た急傾斜を下りると目指
すは丹沢最高峯の蛭ヶ岳の急峻な登りが所用を
広げてゐる。不動の峯あたりから見るとその後に蛭ヶ岳似た
山だが、これに並んで見えたが多分蛭は後の方ではなかった
かと思つたがやはり年前の山で地図から見て一方は松洞
丸に至る白ヶ岳と読みた。非常に蛭に似た山である。
さて縦走路最後の登りとおぼしき蛭の一六七
メートルをさかの放意を表して登りにかかる。初はその
生えた後ハスロードであろうが、だんくに立木をまじえ

さくつめたところに屋根を赤く染め、ひざ位の大きな祠が鎮座してゐる。

山頂は丸味を帯び余り広くなつて、その上圍りの灌木に展望はさしかかられ、やがて西丹沢をのぞみ、陣向のみ小窓を用ひて見るに済まない。此處を訪れる人達は皆一服する所か、空缶や紙くずでひどくよじれてゐる。我々も一休み、こうと大哉さんの差し出す新同紙を頂戴して尻の下に敷く。男だ

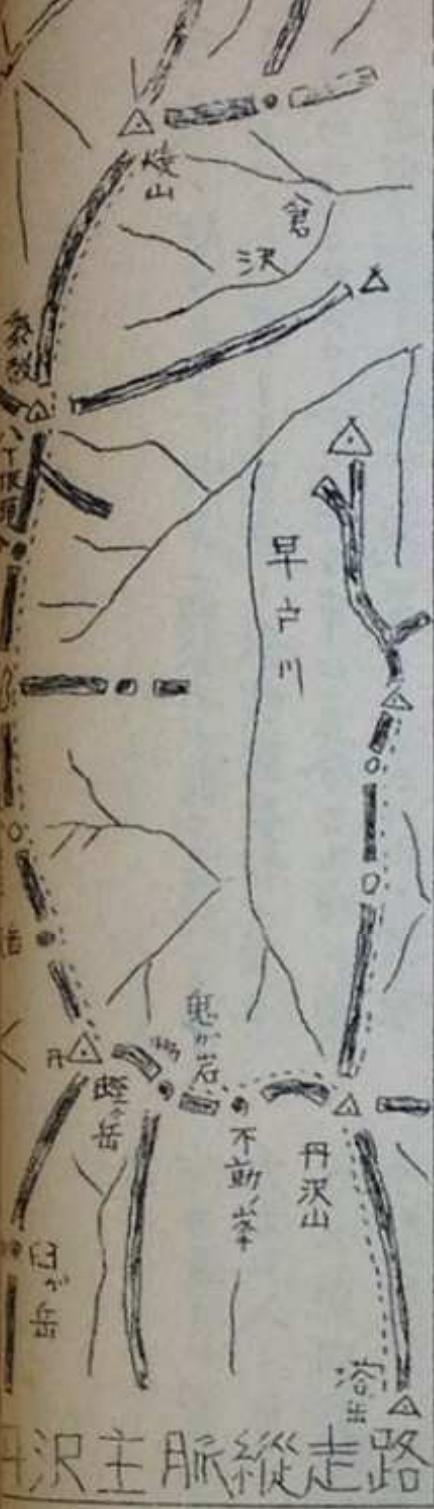
りの三人ハーティでは食料もあまり豊富ではない。武人は先日の源次郎沢の食糧の事か忘れた難うで、金子で度々ぼやいて、それを耳にする。そこでわびいからもゆで卵で少しの力をつける事にする。時間七時半、未だく早朝である。日射は弱く指先

が寒さでこびり、即ち鞍をむくのも億劫だ。どうも居心地は今一良くない、早々に煙を上げる。これから道は北に少々と下りてあるが、銳竹を混じた藪の中のやがかな凹地をくまなく、ぐんぐんと進むとついに怪が途切れてしまつた。これはイカンと言つて五六米も床ると余りほど屋根の中腹をすいて怪が付けてゐるが、このへ人は余りいたゞき、路程である。

そのうち怪は開けネズミの跡を見せず、唐松林の平坦地に入ると間もなく地蔵平につく。この辺から

非常に気持のいいハイキングコースである。

ようやくにして山の奥に入った感覚だ。日は中空に穢れ、薄雲に包まれて樂い、慢歩が始まる。氣が



けくとどうも先を行く吉田のテンポがのろく、黙々と歩んでいる。私はあかし、と後から声をかけると、答氣にも居眠りしない歩き、たゆ。歩行中の睡眠の可能性を度を発見、いや再認識したと、象の目をしほたまく

武さんと二人思わず咲笑した。

何とうらつかな日であらうか。

さほど古くな、原小屋の横を画る。ヒゲヅラの男に時間ときかれ二、三言。梭椤がカケの言葉も交し、やがて少しき坂道を上った。一八〇度の眺望が展开する。美い草原に出た。姫次、原である。今未だ蛭

をたトに見、正面に白ヶ岳、その左脇は大平と言われる。ふとし茅戸で坂に右半上部には縦走路中番の扁玉の容姿に絶えて秋父遠く南アリ迷年六日鉢鞍も運んでいる。シネスコ的見事な蝶のできる。ゆるやかな起伏の高原はまたアベック向

き、我々には登寝の好場所であつた。此夕で大休止する。朝食の残りを頬張るうちに大、武さんは用意のハガキを手帳より取出し絵葉書の作成にとりかかる。それも葉書三枚を横につづってパノラマ的写生である。

さて、うち、か全日を浴びて写生に没頭している

うに、やゝ一時間をすぎた。そろそろ後からのパテイー二、三が我々に追付きて此の広場も少々小さく今も頃鳥屋に向け出発する。

径は以前として蛭から支脈は長大にして軽

快、散歩には申分ない。大、武氏、れから展はからしてハイキングコースに准拠する旨を厳命した。が途中、いくつかの男をも混じた組やボストンバックなどうさびた高校生などに出会つた所を見ると大、武さんの准拠を待つ間でもなく既にハイキングコースになつてゐるうし。

此夕で支脈は東北に緩くのびて八丁坂の下へ、延々一キロ半も続き、ようやく緑の葉も大きくなる山稜の南面をだらだらと卷いて行くうちに水場がある。參合の中腹に至る。起伏の少ない平坦な怪約三十、左手脚下には道支川の溪流をはせん。青根なし青野原の部落が箱庭の林に俯瞰される。それから焼山の手前で鳥屋に至る條と西野村への分岐点に立つべ、これが怪も焼山をぞつている。この山頂からの眺めは広大であるらしい。

此の辺までのコースは仲々寒い、これから鳥屋へは、やゝ一時間をすぎた。そろそろ後からのパテイー二、三が我々に追付きて此の広場も少々小さく今も頃鳥屋に向け出発する。

脈々と今踏破した主脈が日の陰となりて黒く變色する。

代を撤して十三時間の行程は強行かも知れぬが丹沢の全谷を知るには一度は歩くのも良いではなかとの結論は、バヘを待つ鳥屋の部落でほろ苦い液体を飲み干した時の二人の一致の意見であった。

△タイム△

新宿十一時半丹沢号——澁沢(○・三〇)——

立石(三・四五)——塔岳(四・二〇——五・二〇)——丹沢山(六・〇〇)

不動峠(六・三〇)——鬼谷(七・〇〇)——蛭岳(

七・二〇——七・四〇)——地蔵平(八・二〇)——蛭次

八・四〇——九・四〇)——鳥屋(一・〇〇)

△至急バス片割△

ハ・必〇、七・四五、ハ・〇〇、九・三五、十一・二〇、
十四・〇五、十六・四〇、十八・一〇、

最初予定された四人のうち二人が参加不能となり二人だけの天幕生活で寝をあけた。今朝の中川川探訪も初日から雨にたたられ五日前のうち、四日間が雨といふ不遇にぶつかった。それでも最後の日付は雨雲が一掃されて爽やかな五月晴のもとに、山廻の新緑が木に映えて鮮のぼりがひきがえるといふ素朴な山村の情緒を満喫したのであった。



西丹沢

中川川渓谷



二日 悪沢

山縣昌彦

朝、底へさめれば雨である。暫らく杯子を見たが、ナットもないと知ると、やあら起上かる。
水食を消す時、所中にトキガム。トラバは中川川に沿って歩く事十分、左手より悪沢へソルツフが立れた沢筋を見せて命流する。

ふ人の橋より降りて沢に入れば直ぐ下一(十五尋)ルートを特色して、滝の右手に取付く。両端がぬれいるたの必然、登攀手は慎重となる。

下一を過ぎると沢筋が狭くなり暗く陰湿など、ろに下二(二テメ)が落ちてゐる。その直登は西丹沢でも有数と言われる寒場である。

所で滑る岩を萬を今よにへづつて、石芋中段のテラスに出る。此のテラスには數本の木が生えている。



(註)
 a = ジッヘルポイント
 とる立木
 b = オーバーハングの
 岩 F2 寒登のモ
 ノ(トト(ハーケン
 が打てある)
 オーバーハングに取付ける
 でのトラバース滑る
 右岸はスラブ状で全然
 ルートとならない。
 全体滑り易いから注意

次ぐで丁がサックから三、道具と午製のアブミを取出し、登攀準備をする。先づ丁がテラスから下りて壁をトラベースしてオーバーハンプの下に立つ。此處でハーネンを打つてアブミを掛けようとする。ところが打ち込んであるハーネンが効きそつたというのでそのまま、使用する事としカラヒドを掛けろ。かくして小生ジッヘルするうちに左足をアブミに掛けると丁の体がタシと持上る。丁がハシスを無事乗越してジッヘル。小生の番となる。岩が滑るしアブミがグラーーするで仲々取付け難い。約十分を要してようやくハシスを越えて上部へ滑る右を登つて落口へ出る。

すぐ下三(八メ)を迎之軽るく越えろと水量豊かな二千本程の下4が現われる。滝の左手はスラスでルートとはならず。右手に左のバントをトラバースして中段に立る。此處から上部がんが極度に胞く手を掛けろとボローとくづれるので、滝より横に外れる。途中四、五メ体の入るクラクが、あそて快適に突張つて通過。上部は根の茂、木立よりに登る氣味に落口へと出る。

下4をすぎるとやがて沢筋がせまって廊下秋となり、滑滝、小滝、セ、ハメの滝が間断よく続きて現

れれる。快適に左右と巡回を続けると右手から二段三メートル程の滝を落して、いる沢を入れると、うで本沢は左に迂回し、二、三の滝を越すと悪沢最大の下8（三十メートル）に達する。上半部は傾斜が緩く下部は垂直の壁となって落ちて来る。

左手の壁に取付き横に走るリスを頬袋に右にトラバースし滝に沿って直上。上部は滝心をトラバースして右手を登つたが落口附近で水を頭からかぶつて難堪。ヤグリ入って落口へ出る。この辺で小生も丁も雨と潔水のため全身くまなくすが濡れとなり停ると寒いため休む事なく登り続ける。

七、八本の滝、四、五本を軽く越えると左から沢を入れてとも進むと又も沢は二分して水はなくなる。此後も右手に入れば良かつたものを丁の歩くまでは左手の沢に入つたため屏風岩山まで案内書の傍らかくのヤグリ漕ぎを強められた。しかも雨中カヤガ漕ぎとみれば雨水が耳に入るやう目に入るべからで、たた無中でおよそ一時間余りをかゝシテラに歩いたのであった。（両手にヤグリ漕ぎなどやるものではなし）少くしてようやく切開された狭縦へと太、なをも登つて太い竹林のある屏風岩山へと山へ

つた。此處からばトレールを追つて二本杉峠へと下り二本杉からはようやく歩き良くなつた怪を上ノ原へと飛ばした。

ヘタリム

テント（九・〇）——悪沢出合（九・一）——下2上（九・五五）——F12（十一・二〇）——屏風岩（十二・三〇）——二本杉峠（十三・一〇）——上ノ原（十三・四〇）

（註）

悪沢には枝繁が多々、大林水量の多く方へ入れば良い。沢は緩いで滑滯が多い。又岩は極度にもろいから充分注意する。木の根も弱いから樹である。悪沢は人跡まれぬ中川川渓谷でも比較的登山者を迎えている沢で、捲き道も良から、直食に不安を感じる時はいさゞよく捲きた方が良い。

才二日

朝から所で遂に一日中降り通す。前日の雨中の巡回に燃いたたの終日テントの中で寝て

才三日

雨さと降らなければ未登と言わる。丹沢隋一の漫西沢の大瀬の登攀を試行する予定であつたが、令僧く此日も朝から強烈で登攀を前令、後日に備えて西沢へ順察行となつた。此日は空晴といわれる大瀬の舟岸の八十米程を相にも泊まとして水が流れ、巨瀑が相絶んで落ちり称はまことに見事であつた。

才四日 湯の沢中伏

社勝四郎

所今日はもやまと。水でも十二時を過ぎる頃から東の空が次第に暗くなつてようやくにして天の雨降りも終りを告げる。

一時過ぎアントをみて湯の沢に入る。河原を駆石松に直づばやがて左手に二段で本沢に登る。左岸を覗るところあたりから沢はつゝじよとなつて屈曲し、奥もつた後に二段に落ち下りに達する。釜にシロバ进入到湯の石手に取付き、左脇を急突り壁とバランスを保つ。上部はバードストラベースにて落する。

次いで二三の十度、堰堤を越すと十五米程の堰堤がある。これは左手の壁に取付き上部は檻木をたまうにバズする。この上部は広い河原となり左手に幾段小屋を起る。その前から木橋を渡り湯の沢太令まで付くられてあって二十分もすれば太令までおられり。

左とも小渡を下さると正面に左側の大瀬(五十メートル)が樹間に一系の澤水を斜けて落ちて来る。左側は大瀬まで往復して全高を測るが、この辺沢床が奇麗で磨かれて滑となつていろ。やがて右側に三段の堰を落して、左岩、右手大口二十米程の堰を持つ中伏が現われる。

今日は中伏に入る。下ノは滑水の傾斜の緩い處、右手に取りつたが岩がもうく手と斜りるとホロホロとでいい岩がくずれるには參る。

下ノからすぐに下2(六十メートル)。堰は上部がネジれて傾斜が緩いため下部二十米程しか残てない。左手の壁はたるんせ状に入れて壁木をたまうに壁に取付く。三十センチ深水に浸って金うし、上部は岩がもろく、タンスが寄れるので本手に入つて直上する。(湯の沢の傾斜が緩いため底水が底を流れたり月を水を浴びさせて滑じて、左手の壁は深處に張り出る二段まで滑となつて緩そ

ト(草木)の壁、滑るので注意

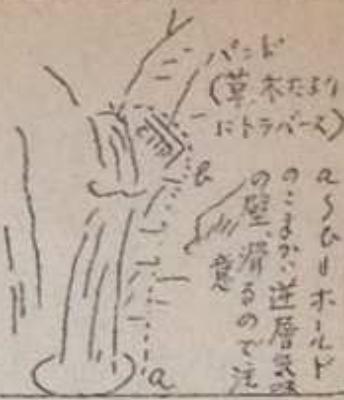
T傾斜やる。下から堤防部分
水中に入る

20M



Fルート図

中股F2ルート図



最後の二股・此へから再び中股を下降する。下2

は右岸のヤブ中にルートを求めながら漸からぬまゝ離れて

しまつて大分岩のもう、又に出て一苦労へ翌日再び此の沢に入つた時漫に沿つた巻き道を発見した。下1は左岸さむく。

中股から下りると未だ時間があるので右股の下6
き物色。某案内書によれば左岸ルートが困難で、希望ルートであるとしているので念のために試みる。カレの持主の右手と五六本登ると太い立木があり、此處からガモをトラバースする。(此のカレは相当に急でくづれやすいから注意する) その先は急坂を灌木藪で腹から入る場合は左手を大きく捲くルートよりも漸をすぐ横に見て登る比のルートの方が歩味はあるようだ。

帰りは広河原から木推進を伝わつてテントへと

タインへ

テント(十三、一)——広河原(十三、五)——中股下ノ下
(十四、五)——最後の二股(十四、四)
3——中股下ノ下(十五、一)——右股F1上下(十五、
三)——テント着(十六、二)。全中十五分休憩

(註)

F1の直登はどう案内書も相当裏によく書かれて
いるが、ぬるくはするが高さも下段四五木であるから
落ちうつもりで登れば良い。

全体この沢は短かく柵も少ないので日帰りならばともかく信玄館に沿つて入る場合は右股又は中股だけを
やって小川谷へ下つてしまふのは少々物足りない感がある。従つて中股を登り最後の二股で再び沢を下降し次いで右股を登つて爾後沢另たりから小川谷へ出るが、右股を再び下つて信玄館で一旦呂浴にて帰る行程をお終めとする。時間的に充分間に合う事と思う。なお中股は登攀中後方に前方に来る者となる場合、必ず中股が出来る。

朝六時、のこくとテントからは、出せば目に沢みる桺と青空が谷間一杯に広がるのであった。湯沢後方の稜線から射し込む陽光は対岸の悪沢あたりの山々の緑を、やがてにも前を立たせて、すがすがしく朝の空氣が此の山間へと偶々にまで忍び寄つて来るのであつた。中川川に屯つて初めて見る日の光、それは四日間の陰鬱を癒すに余りある夷やかな山の朝であつた。

此の朝登攀を前にしてカメラ、繪矢に気が付いて前日の湯沢中腹最後の二段までの往復へ一時河井とハサ番外の一幕があつた。

箱根屋沢

湯の沢から帰ると早々に飯を食つてテント（湯ノ沢本合）を飛び出す。九時十五分箱根屋沢本合（橋）着く。箱根屋沢は寒沢の隣りの本合から堰堤の見えざる沢である。

左岸の踏跡からすぐ沢に下る。河原に土で頬の洗つてす、草に気付く。何より今日はあわただしかつた。やあら腰をかゞめて水をすくう。

沢筋はしばらく平坦であるが、次第に傾くなり、小滝、滑が瀧がれ、やがて、簇、岩壁の間を押し開く桺に三段の滝（三十才）が落ちてゐる。

この辺新緑が陽に映え、流れを染めて美しい。さて、此の滝は某カイドスックによれば、一下段は遂層であり上部二段は苔の附着した完全なる一枚岩で直登は無謀であろう」といふ滝である。ルートを右見て釜をトラバースして取付く。此のトラバースは少しだけ全然釜は深いため入れない。上部は木の枝が少しがどう登攀は誠に快適で沢登攀の醍醐味とはかくやあらんと言つた登攀だ。

三段の滝を越すると、二、三の滝にぶつかる。落石のハシゴもせず、八本の度は右からルートをとつたが、ハシゴの下の岩がありとも脆く滑りで、ルート左側からえて越す。

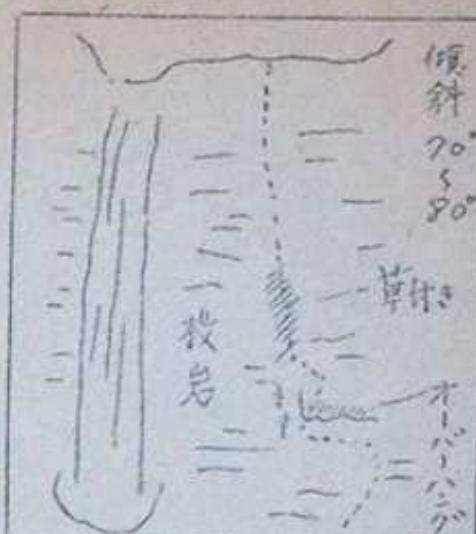
やがて二十本程の垂直に落ちる滝を越える。右手に云々一枚岩。手のひら大壁が登攀欲をそそる。サイドアングルは滝を左手で登つていふが、いめじめしたつまらぬルートだ。

此を一枚岩にアタマクする。また傾斜のゆする、ところから少々オーバーハンプした傾斜へ云ふ。ハンプを桺の先へ小さな木や草をたすきに越える。

傾斜 20° 50°

草付

オーバーハング



岩は横にリスを走らせて
いるが、オーバーハングとはならない。
(三ツ道具を持参すれば
その結果は充分に發揮
されよう)。此處で泥付
の草の生えたところにル
トを求める。さてその上部のかわらいた岩の感覚が悪
くなる。こまかにブレインが一ホールド(指先だけが掛かる)
さばつての金棒は壯大なフェース登攀の氣分を説
つたところだ。

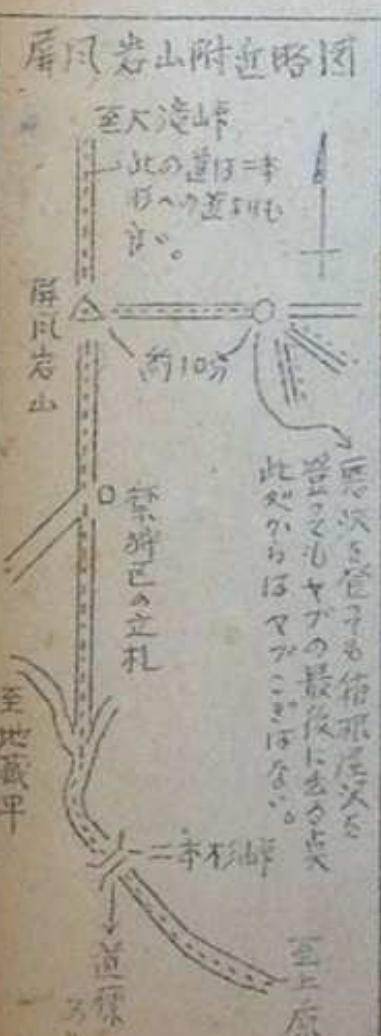
この辺からすぐの大滝(二十五メートル)に達する。この滝
は下部が大きくハンターであるため直登はちと無理である。
それでも上半部は登って見よう。と左手のステップ状
の岩を登り立木を頼ってトラバースして滝へと下りる。(こ
の所ヤフの中には踏跡が二三本あつたが、迷つて見ると終
て戻路であった)。上部はなとも十メートル立木と言つた滝
が教本統く。そして又二十メートル程の滝三本程を渡
えるが、最後の滝は左右の壁と取付けて取目となると
横にそれで立木を頼よなどしなから趣する。しばらく

と上部にはこれと言つた
ホールドが見当らない。一枚
岩は横にリスを走らせて
いるが、オーバーハングとはならない。
(三ツ道具を持参すれば

小手全滑滝が続くが、そろそろ水も少くなつ頃十
米ニ及ぶ滑滝にかかる。右から取付き、中程で左
手に移りカラカラした所をアーチションとハラシスで
越える。手も滑らずすがると水も全くなつて底土を
越えんどいよ／＼やでの出発となる。

最初のうちはたゞしたやうでもなく、十分も登ると
足根へ出る。こゝから左へ折れて足根の踏跡を辿る
のであるが、ヤマガ底坐して、歩くたびに経き分けを
ければならぬ。途中直ぐ目の下をストップーと叫
うながらいのしの通り過ぎる所を目撃する。それか
ら大分行つてから、又、アーチー、カラカラやりねえ、あ
まり気分の良いものではない。

ようやく効用つかれた袋縄へと来る。此एカラ
は屏風岩で約十分間登り。波ノ原は二本杉崎
からの富士が見事だった。



合(一十五)—大淀(十・十五)—ヤガ入口(十一・十五)
 —我谷(十二・〇)—屏風岩山(十二・一〇)—二本杉
 —上原(十二・ニ〇)

バス時刻表
(帰路)

バス時刻	落合	→新松
6.30	6.40	
	7.20	
	8.00	
	9.50	
12.05	12.15	
	13.30	
15.40	15.50	
	16.30	
	18.30	

中川川に入る起点はエーシンと同じく小田急新松田
 箱根谷戸である。バスは落合又は焼津(ヤツヅ)行。
 トモジ^{トモジ}で下りて河原に降り、バスの最終は新松田発八時
 今焼津行(前号八時十五分は旧時刻)
 雪は落合でバスからおりたらすぐ買う。落合から
 までは歩きで約一時間 焼津からは三十分。
 ント場は湯の沢出合が最適である。(河原に降り
 には館玄館へ中川温泉へ入口の指導標がある
 怪ま下つて信玄館をすぎればすぐに出る。)
 在新築中の温泉館落成の時にバスは畠まで
 る由。そうすれば日帰りの行程として中川川にも多く
 登山者へ入り込むだろう。交通が便利を効くには、
 だ玄倉川渓谷程登山者を迎えていないうだが、

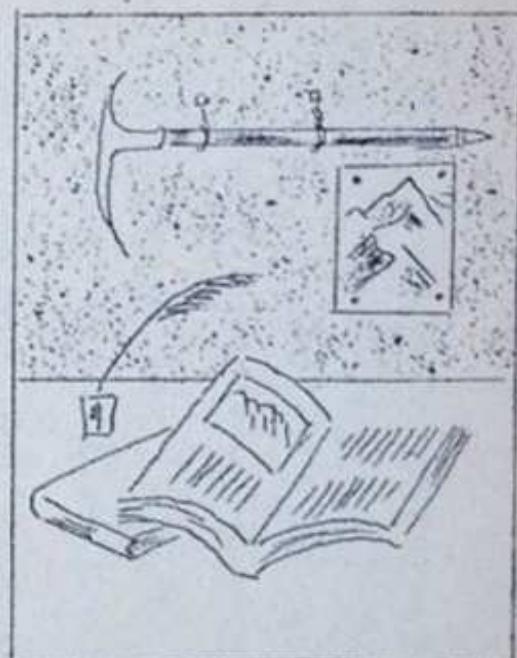
訪れて矢印はしない。玄倉川とちがって朝早く立てば、
日帰りも可能である。

各沢は直登するとなるとユーシンに劣らず、やそれに
 上にキツイようだ。又玄倉とちがって中川川一帯の淀トは
 オーバーハンドの仰所が多い。だから裏湯の直登には三つ
 道具のみならずアームも必要となるて来る。從つてこれ
 から一々倉沢あたりに入ろうと思う者には習得過程
 として浴好のレンジデを提供してくれる。
 緊して山石が脆く、ヤブは手強い。手袋は必須
 衣服は丈夫なもののが良い。ヤブの中ではワラシで歩
 かなければ下ぐ靴に履き代えよう。尾根には殆ど指
 導標がなく、屏風岩山附近では二本杉峠で観たのみ
 従つて磁石も忘れず一事。

惣汎、箱根屋沢を登った場合、屏風岩山からは
 大淀峠へ立ち直り、すりが夏たところ歩き、ようだ、バス

には、の便が云つて帰路は二本杉峠へ立た方が良、だらう。

山岳書紹介(その1)



M.Y

よろめき、倒れ、たゞ一つの良き目指して体を引さず
し、遂に頂上を極めて四十一時間後、老人の体に
鍛だらけの顔をして底って来て男こそ、此の本の
著者ヘルマン・ブルである。

ヘルマン・ブル著
横川文夫訳

『八千歩の上と下』

一九五三年七月三日午後七時、二十九歳のクロ
ーの青年が唯一人、標高八一二五メートルのナンガ・バル
バットの頂に立つた。

著者は登山家マムメリー、ウェルツエンバッハ等既
に二三十名の人命を呑みこんでしかも何一つ上るよう
とへりかつて巨峰ナンガ・バルバットに挑み、頂上より
高麗一二〇〇メートル、直線距離六千もある最後の高所
ヤマンハを唯一人、朝若々しい顔で出發し、

更に此の本が我々の胸を打つのはナンガ・バル
バットの登頂に至るまでに彼が幼時から山の呼
声に引かれ、故郷インブルックの山より始め、ドロ
ミーテン、西部アルプス等……マルモラタ南西壁
ハイレ北壁、クランド・ジョラスのバットレス、ア
イガーノ北壁等……より困難を攀登へく、何時
か未だるべくものゝたのに漸々自から鍛えて
いた生々しい記録である。それがナンガ・バルバ

「会務報告」

△新年度役員△

新年會役員改選は去り四月の急会に於て出席者二十四名によって行われた。会長には候補者として鳥本、大河、辻の三氏が立ち投票によって行われたが、僅少差を以て辻現会長の再選となつた。を副会長の吉田、村山、会計、筒井、書記、村田等の他役員は前年度より引き継ぎて留任となつた。

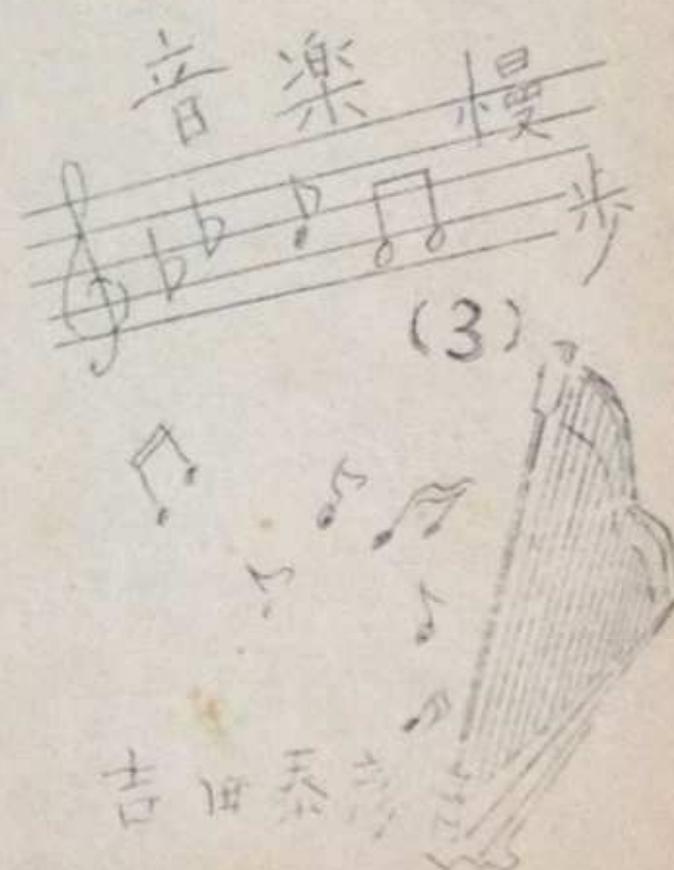
△山詠会開催の件△

同説会は於て毎月第一週の金曜日午後七時より山詠会を持った事が株式された。場所は皆今山野氏宅にてます。今五六月七日の山詠会は特に賑金いねしがして、今夏の山行計画、会費、信上室等が議題です。当時は北アルアス、南アルアス、谷川岳等々、行もありますから一カ月間疊合せき上生原あら人等、ヤツヤツ行います。

△備品購入△

・ テル二本、アイゼン(ニ)、ラジース(ヘ)、ナタ(ヘ)
ランタン(ヘ)、一以上五月月中旬に購入

至る備品は數々限りますので使用に當っては日本國、余裕を以つて申出下さい。



ほとんどの人が好む音楽家はと問われるべトトウベンハモーヴアモトと答える。更にベートーベンのものでは交響曲で第五、第六第九を興先さうに挙げ、モーツアルトでは三大交響曲を何人らかのらはす示す。此の二人にはこの他に数々の優れた作品があるのだが、此の辺のところが一番お気になります。そらし、ベートーベンの第五交響曲は才三交響曲英雄から發展したもので、いかにも力強く、なんでも

自由を求める熾烈な精神が内にこもつたもので、
あると云ふことで会長はほんと得意の曲である。

第六交響曲は、とにかく美しい。感覚的に華
やかアリズムと見做されそうだが、これは誤り
田舎の田園風景をひこます自分のうち引きこむ更
にそれを音によせてつくりとつているのだ。この頃ナホ
レオン軍が破竹の勢を示して、る時で、こうことが、
ベートーヴェンを相当悩ましらへ。
第八交響曲はベートーヴェン音楽の総決算で
あり規模も内容も最もすぐれており正に感動的で
作曲である。特に終楽章に声樂を採り入れたこ
う曲は古今のあらゆる作品の頂美であると思われ
る。原曲の山縣さんはこれを聴いた時は感動の涙
で頬をぬらしたという。

モーツアルトの三大交響曲は、いずれも一七八八年
の作、三十九番は詩情をたたえ世人向き、四十番
は悲劇的を感じかし、四十一番はショビターと呼ば
れ堂としている。

上う曲のうち山縣さんのところに四十番がシューべ
ルトの未完成と表裏となつて入つてゐる。

(註) 六月七日は山話会の開催上、時間は一時間
繰り上げて六時より開催。なぞ会員以外の人
でも希望される方は遠慮なくお越しください。
たゞ一席を取るような会場である事を御了承の上。

L.P レコードコンサート(山縣宅夕七時)

- | | |
|---------------|--|
| 5月31日 | 三大 バイオリン協奏曲の夕 |
| | (1) メンデルスゾーン (2) ベートーベン
(3) ブラームス |
| 6月1日
(山話会) | (1) シューベルト「未完成」
(2) ドボルジマック交響曲「新世界より」
(3) ベートーベンピアノ協奏曲「皇帝」 |
| 6月14日 | (1) スメタナ「モルド瓦」
(2) チャイコフスキーピアノ協奏曲第一番
(3) フランク交響曲ニ短調 |
| 6月21日 | ロシヤ音楽の夕 |
| | (1) プロコフィエフ「キージエ中尉」
(2) ラマニノフ ヒアノ協奏曲第二番
(3) ショスタコヴィッチ オラトリオ「森の歌」 |

動物

(1)

丹沢山の鳥



K.T.

くなつた。彼等動物の樂園は、次第に廃地の序次と移つたのである。

玄倉川に入った時は殆んどアザラシの中をすかせた爲、度つた動物に出会ひやすむがたが、本邦から放り出され御馳走になつた。少々味付せがすがつたが、それでも竹村野趣豊かなものであつた。底の内は残つてゐるが、

が一番美味いをうでゐる。この辺は玄倉川の下流で、

飲みに玄倉川へ下りて来る。城下には多くの木立があり、

羽鹿になると見えたが、アザラシを食ふ道をくわぐりに背中にひつたりと付け、草木に隠れて、人一

カモシカもよく本流下りとのりこつて、アザラシの上に

くから見て、うと向むこして、二重門の前角を三竹を一

にては人の仕草を見て、やうやく。

ユーシンで我々が倦きる程、あ口に掛かるのはがまでもある。特に両中、兩役ともなると彼等は玄倉川へラン

テイバーと酒落込し、モチコシ八ヶ岳に玄倉川の河原でやがて十キロ程のところに十村正のケマがおさ

す。草木の小屋番の話では水無川や勘七沢には、或はく、鹿やカモシカが姿を現わすそうである。或

年冬期に沢から入って表尾根を下つた時、雪の上に

數の立初の足跡を認めて驚いた事がある。しかし近頃は表向には表丹沢で珍らしく動物に出会う事もな

うつぱりすると踏けつけねむ。そんばゲマのカツアルに

石を立っては木に入つて、水の会員には居るのである。此がマハ灰をもて焼て食つとう

ま、どうで、今度玄倉ト入る時は全度御用諸様ウタ

たのに灰土産、どフさり採つて玉ようと思つて、

中川川に入つた時は少々驚いた。

中川川一帯の沢は沢を飛び下降する以外殆んどや
がさ音で尾根を越つて下りなければならぬ。近
頃は此の辺も開けて熊は殆んどなくなつたそつた
が作物の収穫時には毎晩の林にいのししが出没
しては炬き荒すそつて

「野郎は夜中に走るでは不ざ意だ。だから近頃
は夜中に炬き荒るでもそくして、るのを見たら鉄
碇持つてあつ孫人で行くだ」と村人の話であるが
これを聞いて河原では夜半に鉄打つて常とする小
生も、これは安用と夜中に碓も打てないと少々慌て
た次第である。そんな話を聞いた二日後ヤマの中
で当のいのし君に初見參つたのであつた。

時は春、山は新緑の候とあつて見れば、人皆心
浮かれてさやかなるに、何の不平か、いのし君は、マ
ブウと鼻を鳴らしながら目の前を通りすぎた。三十
分程のヤマ漕ぎで二匹のイノシシに出喰わしたが、

しし肉にありつゝ人と更う詠石が一つ處に居て
一日中ヤマアラ中で居る事だ。

動物と言えば、湯ノ沢附近には、馬鹿にも慣習事件
の美人が居た。そう丁度武令の酒井女史のこ
少しお落した舟をそんなん取らしめ人である。それもほ
め人と歴する者には何が何でもオレに手付け
し傍にこれ、裸翁が付いて、おれが舟を取らんと歴
すればまずどう馬を用ひばなう。

この辺一帯の沢には溶岩吹かう。昔ながら冬眠
の習慣の時でもあつたものか、こうくへようく
馬鹿でハリカが勤まねる。そんな蛇を以つては石
を投げつけ、或は大さな石の下にもぐりこむのを
テコを伏つて石を持上げては打殺して、う巣をよみが
何處かには居る。

さて中川川の朝より夕方にはまことにものとかである。
河原のテントじうたんをすれば、壁がコロコロと
交換する姿で、時には河底がゾロミ交える。こんな
山村の風情に梅すれば、音楽慢歩の我がリウマチ氏
も恰好を短袴とばかり、痛い處を引つては一文も物
するに達しない。どうだ、どうぞええば此處にヨリシマ
チに下りかくどう信玄の温泉があつたつり。

谷川岳春期合宿

(五月十八日)

一の倉沢

村田俊満

（メンバー）菅野・齊藤・村田

（天候）快晴

マチガ沢出合ベース・キャンプの設営も終り、簡単な朝食を取り残雪豊かな一の倉沢へと向う。さすがにマチガ沢出合を過ぎると人影もぼんやり森奥とした山の氣分も味える。

約二十今程で一の倉沢出合に到着する。一の倉は両壁が高く空に突き上げて、やが上にも我々の登高欲をそそる。長く続く雪渓、大きな岩のブロック、

山縣・辻・吉田・村田・菅野・山崎・
邊江・田中（良）・中島・齊藤・

（装備）

サイル三十米（三本）・補助ワイル（一本）・テント（三）
ハーベン（十五本）・カラビナ（二）・ハンマー（二）



一の倉沢（ルートは南稜）

日時 1957.5.18.19.

— 24 —

今、あれならお前らでも大丈夫と太鼓判を押して
呉れへうぐ、それではと腰を下した次第である。大分山
森御左介もまたどうな顔であったが、学板をさげる
試にも、か不思ひ止まつた。

この沢出合に六時三十分到着、此處で暫らく雪
峯上、ヘリツアに対する防止とその处置を菅野さん
から教わり練習する。

一ヶ沢に入り約三十分で上部から枝沢が入り下沢へ
来て左側の地表に達する。傾斜約三十度、アイゼン
いはらずステップを確実に切り、アンホイレンする。

一往復して斜面が増々急となり直登が
困難となる。止むを得ず大きくシカサグにコース
を下り途中二、三回スリップしたが、アンホイレンし
て、あ陰りで壁落を免がれる。

やがてシンセン尾根のコルに達する。

此处からの展望が非常に良くマチガ沢と一の倉沢
六年にとる林に望める。ここで暫らく休憩の後シン
センセン尾根を登り始める。マチガ沢から見たシンセン

尾根は一寸取付木舟もす、岩尾根であるが、取付
いて見ればそれが程でもなく割合に簡単なものであ
る。むろん丹沢あたりの沢登りをした人なら

大丈夫であらフ。多少所々にマチが沢が深く
切れ込んで、る部分はある。されば所は高度感
があり女性では無理かと思われる。

幾つかの岩峰を右に左に捲せて更に高度を稼ぐ。
コルから一時間半も登つたろうか、急に上の岩境が
金切れ、オキの耳が見えて来た。幾つかの雪庇を
越えオキの耳直下を攀り登りオキの耳に達する。
オキの耳着十時四十分、暫く休憩の後、帰路は、
西黒尾根からマチガ沢二の沢をタリセードで下り、
ベースキャンプに帰り着いた。

〈コースタイム〉

マチガ沢旧道出合発(五・四五)——の倉沢(六・二)
——の沢出合(六時三十分)——シンセンのコル(八・四)
——オキの耳(十・四)——三十分休憩——

——西黒尾根と巖削新道分歧点(十一・四)——
——ベース・キャンプ(十二・二)

〔註〕

此のコース・タイムは矢上の人びと歩いたもの
である。通常は一の沢出合からコルまで一時間
コルからオキの耳まで二時間となつてゐる。

(五月十九日)

一の倉沢鳥帽子南稜

山縣昌彦

ヘメンバー、土勝四郎・山縣昌彦・吉田季彦、菅野達也・山崎弘一・村田俊満
ヘ天氣、朝・小雨、後曇、時々薄日

はマツターホルン、状岩峰が聳え、滝沢上部が
一望のもとにあり、残雪は各ルセを明瞭に示し
てくれる。

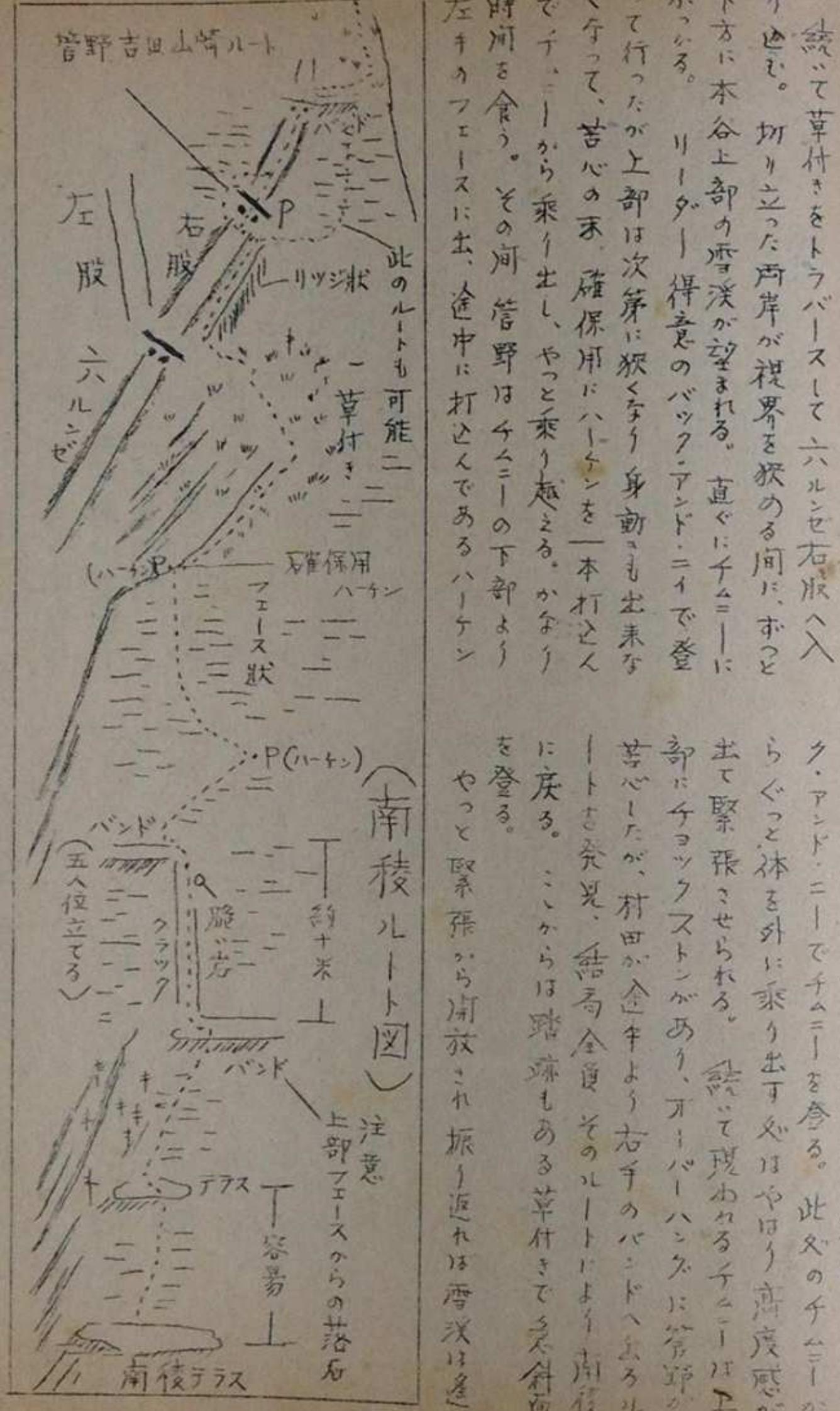
マチケ沢旧道出合のベースキャンプ地を出発した
のが少し遅かった為、一の倉の雪渓を踏んで鳥帽子ス
テラスに取付たのは七時少し過ぎである。気付かれて
いた空からは先程から細かい雨が降り始め、一の倉上部
はカスに包まれて、例の陰陰す様相を示してやる。
いくつものパーテイが左チーの沢へルートをとつて
行つたが、鳥帽子沢スラバの途中にも五人程の一ハ
ーティ、登つて行き、その後に上、テラスあたりにも
二人のパーテイが見える。

天気はどうやら、良くないようである。勇躍スラバ
で登つて南稜テラスに達する。

、つゝ町にかかる、がスも上つて奥壁を望み、は
空ナムモ沫を振はす滝沢下部、そのスラバの上方に
待たれる。南稜テラスから先ア十本ほどの木谷
寄りにルートをとつて登ると、所が小さなテラスに達す
る。ミ、で又三十分近く待たされ、しかもその間に
上のパーテイの落した石の一つ、オーラーの頭に命中
したが幸いコト位で済み一同ホソとする。遂に
下方の雪渓では砂糖にたかる蟻の如く炎々と雪渓練
習をして、る人達が見える。

前のパーテイがやつと済み、よく、我々もアンサイン
して岩壁にとりかかる。テラスから猿のランクを越
し、続々南稜のクライマックスとも云われる二〇〇三〇
メートルのフェースが始まる。傾斜は七十度位あるが、
何うも右は鳥帽子岩真壁、左は本谷がぐんと切立
つて、る上に足元は南稜テラスから鳥帽子スラバ、更
に下の雪渓まで切れ落ちて、るため高度感は充分で
ある。ザイルのトップは右ヘトラバースし、念の爲に
パーテイを一本打ち込んでから左へ回り込む様にして
此のフェースを乗り切る。岩そのものは堅く、ホイル

スである。



続して草付きをトラバースして、六ルンゼ右股へ入
り込む。切り立った西岸が視界を狭める間に、すつと
下方に本谷上部の雪渓が望まれる。直ぐにチムニーに
て行つたが上部は次第に狭くなり身動きも出来な
く、苦心の末確保用ドハーネンを一本打込んで
でチムニーから乗り出し、やつと乗り越える。かまう
時間も食う。その間管野はチムニーの下部より
左キクフェースに上、途中に打込んであるハーネン

を登る。
やつと取繩張から開放され振り返れば雪渓は遠
く、アンドニードでチムニーを拿る。此々のチムニーが
らぐと体を外に乗り出す必はやはり高度感が
出て緊張させられる。ここで現われるチムニーは正
部にチョックストンがあり、オーバーハングに斧節が
苦心したが、村田が今年より右手のバンドヘルメットを
一トを余見、岳面全便そのルートによく南稜
に戾る。これからは踏跡もある草付まで斜面

もそれに戻る。村田、山森ほほの確保によりバッ
ク・アンド・ニードでチムニーを拿る。此々のチムニーが
らぐと体を外に乗り出す必はやはり高度感が
出て緊張させられる。ここで現われるチムニーは正
部にチョックストンがあり、オーバーハングに斧節が
苦心したが、村田が今年より右手のバンドヘルメットを
一トを余見、岳面全便そのルートによく南稜
に戾る。これからは踏跡もある草付まで斜面

かにて、めり、トマの耳は目^ノ前に突き立つてゐる。

チニード浴びた砂が顔にくつゝ、襟元からシマソのせしも入り込んでゐる。

代々を宿分待せた先行のニバーイは前後沿
うかなイ未だ下方に居る。時計の針は一時を同
じた。荷草を食事を済ませて一息で鞍縫へと
ひ去す。一時二時である。薄日の射す尾根を
足音を響き樂しみながらそして各自に成し遂げて未
若同を願ひかねばトマの耳へと何う。

肩の小屋から西黒、天神西尾根の分歧あたりまで
例年ウサク雪がかなり残つてゐる。巖剛新道を
石へへれる少し午前よりマチガ沢ニの沢に入り、
タリセートで飛ばしテントへ戻つた。

ハコスマタイム

マチガ沢旧道本合（六・二）→エボシスラブ取付

（七・一五）→（七・三五）→南稜テラス（八・〇）（八・三）

→（次のテラスで）（〇・三）休）→六ルンゼ右股ヘト

ラヘル（一・三〇）→六ルンゼ上部（〇・二〇）→

→五ルンゼの頭附近で中食（一・一五）（一・四五）→

→一・九倉岳（二・〇）→谷川岳（トマ・ニ・四五）

→マチガ沢旧道本合（三・五）

（五月十九日）

谷川岳—蓬峰縱走

斎藤良則

ヘメンバー

龜江・中島・田中・斎藤

ヘ天気

朝小雨、後曇時晴

一の倉沢に入るバーイを送り出してから代々も

すぐ準備をしてすぐテントを半発する。昨日の
夕刻から下ト板とをつた空からは先程、かの小雨
が落ちてゐる。西黒尾根の取付奥に出て、すぐ

登りに掛かる。夏程では無く日曜日だけに今

日は此の尾根もなく賑やかである。しばらく
登ると雨もやんで因縁鞍縫あたりに青空が見
之始めた。今日も天気は何とか持ちそうである。
頂上附近まで来ると怪がぬかるみ出し、残雪がす
くなつて来る。

尾根の取付から三時間で頂上に立つ。此處で
一時程度休憩し簡単な食事をする。ガスが
消えて展望が初めて来る。

十一時、いよいよ蓮崎に向けて出發。さすが
今頃は蓮への旅支をする者も少くと見えて、此の
駿移は人影もまばらである。怪も今迄より歩
き言ふし展望も又素晴らしかった。參り、気分の
慢歩となる。昨日登ったシンセニ尾根から上から
見ると神々に意匠のには驚く。やがて一の倉岳

北畠・うり茂倉への脇のスロープで暫らく代る代
をスリセードの練習をする。茂倉岳では林を穿
もなく熊笹の中の踏跡を武能へ向けてぐんぐ
と下る。途中の桂平で昼食をとり、腹を満し
て脚を上かるとやがて怪は登りとなる。何脚もな
がら、疲らせられる武能岳へ登りだ。それでも
一千㍍でようやくの事で頂上に立つ。

十一時、いよいよ蓮崎に向けて出發。さすが
今頃は蓮への旅支をする者も少くと見えて、此の
駿移は人影もまばらである。怪も今迄より歩
き言ふし展望も又素晴らしかった。參り、気分の
慢歩となる。昨日登ったシンセニ尾根から上から
見ると神々に意匠のには驚く。やがて一の倉岳

それでも雪の上に踏跡を見付り、それを辿つて下る事とした。しかし、この踏跡は夏径とは大分ちがう、りしく踏くと奥までに湯檜曽川へとのびてゐる。今更径を採すのも面倒である、何うとも消る様に下る。どうしてようやくの思いで湯檜曾川へと本た。

此處で一晩心して小休止をする。ところがよく歩き出でて向もなく階の上の足跡と見えてしまつた。それでもさ倉又土合みたりまでもすると階も消えて、ようやく土を踏む事が出来なかになつた。時間が太翁捕つたのでベースニヤアでは皆ハ配してくる。どうと四人の足は自然早くなる。マチケ次本合ツムヘに沿つて六時半田舎に上る。もうあたりは薄暗くなりてマチケ次のテントの灯がうすぼんやりと見えそ

来るまであった。

此だからはもう登りはない。展望を樂んで、すゞ出発する。夏であればあ辰加となるあたり未だ時期が早く花々姿も變えない。蓬崎道がくまつて来る。雪がめづらしくなつて来る。峰へは土手で松草の斜面を滑る林に下る。やがて次に層波でつゝく、あたり一面も雪となつて道に徑

（タイム）——ベースキャマンア賀（六・三〇）——西尾根（六・四〇）
——谷川金（九・五〇）——休憩（十一・〇〇）——の倉安
（十一・五〇）——笠平屋食（一・二〇／二・〇〇）——式部塗
（二・三〇）——蓬崎（三・〇〇）——湯瀬曾月（四・四〇／)
五・十〇）——佐倉次太朗（五・四五）——マチガ沐
ベースキャマンア賀（六・三〇）

△反省△

今回の合宿は、痼野立奴君の参加にも係ゆらず比較的好天に豊まれて何等の支障、事故もなく樂しい合宿であった。ただ事前通知べ不確であつたため参加メンバーが判らず鳥に現地でルートを練り全書きなければならなかつたのは少々手苦くあつた。又ヒッケルが不足した為、継走パーティには少々苦労を掛けたようである。参加者が次第に多くなつて末の方は良々傾向である。出来れば女子による白モロ巻きも実現させたがつた。

バック・アンド・ニーに邪魔になるからとピソケルを持っていかず、從て下りには、独りでく／＼奈川を下り去ったもの、吾々が快適にスリセードで滑降してゆくのを見ては燃らなくなつたのか、途中で稼切れを拾つてマイガツを滑り下りて末の方には奮つた。

次に吉田君は、例の如くよくトップを助け、その頑丈な体躯と岩に対する感覚は頗も一・限りであるが、下りのタリセードだからシーセードだとは、持病のリウマチには毒であろうと気がもつた。菅野君の鮮やかなティアラック、例のチムニーを出てフェースを登つていった勇姿は、吾々男にしか見る者べ居なかつたのは惜しまれる。

山崎君はさすゞ大學の山岳部に、るだけあってその確実なテクニックには、ろ／＼敵えられる处があり、唯一人ナルで完登した者は範とすべきであろう。但し、革靴をスラブの下に留め置いて末の方は勿体ない。

最初に受けた落石にもひるまず、終始サイルのトップに立つた辻川一郎君は正に会長の貫禄十分である。而も例のくたびれた眼鏡の片方の柄は、遂に今烈し代りに絞り辛ろうじて耳にかけられて、たゞお顔見付であつた。又登攀欲旺盛な会長は

本日が、あのズボンの裂け口はちと大きかった。

本日は針と糸を始終持つていた方が良かろう。

最後に筆者たる者顧問は、御先休も。

演習山岳会にとても祝すべく事あらかじめ何日ともあれ、六人のパーティは始めから少し多いと思ったが、一人として一用もスリップもせず、

スケートに登攀する東大生を嬉んでいる次第であ

個人小行路報

三月十九日 谷川岳冬山

吉田、菅野、土

三月十七十八日 秋父・金事山

吉田

三月二十一日 谷川岳

山縣、猪四郎

四月五日 鹿児原・泡沢

大武、單独

四月二十八・二十九日 面秋父(十文字) - 甲武信一・藤枝

山縣、辻

四月二十九日 菅徳山

松井、岩崎

五月三日 南ア、鳳凰

猪崎

五月十九日 二十五日 北ア、穂高

猪崎

る。

付角を語る(2)

大武昭雄 氏

筆

吉田泰彦

今回は放音界に此の人ありとの名聲を轟かず、我今之至宝、大武昭雄先生の登場です。薄給を嘆じながら、ニーモアに豊か、ウイットを解むる先生は、跡には黄色の振袖を引掛けては「クイッ」とぱく」ナップさります。

雨雲の空から雷が一瞬飛んで去り、放歌にはさくと突き出た時、今日はもう雨が降らなくて、走してにっこりと笑う。急坂にや、疲労云々の唄には激励歌なし、詩を元氣の言ひ大声を出し、且つ音程のよい声で「ヤマホー」と叫ぶ。余韻を出せば度らず他人に先に渡し、自分の口には放歌に入れる。次の流れの上とくうぐすの清らかな鳴き声を見事に聞き分け、祐れす、この歌を本気で折つて口にくわえ此う断句の手締を秀潤發を味う。取扱では意の化身である小笠原千代

山を回りに從え電池の構造から雪國の子供の生活を語り、授業時間が少しでも余れば子供の鼻をかんでやりながら山の清水のうまさと、心地良さ山の旅話を語って聞かせる。そしてメニデルズゾーンの最大傑作の旋律が美しく感傷的な具合で協奏曲を愛す。

顧わくば末長く本会に所属し、人向の良さ、美しい音色で歌ってもらひた。

大傑作の旋律が美しく感傷的な具合で協奏曲を愛す。



近藤澄江

料理(2)

その一　マカロニ

前回のマカロニ料理に引き続いて夏にふさわしいマカロニ料理をもう一種あげる事にしよう。

マカロニは十分伝へてて、水にとり洗って水を切

かして塩とよく混せてゆでてマカロニにかけて下味をつけ

る。次にニンジンをせん切りにしてゆでて同様に味をつける。キャベツは一枚づつはがしてよく洗いせん切りにして塩

をかける。以上の材料を全部合せてマヨネーズである。此の時、玉ねぎと酢を用意して玉ねぎを薄く切り酢につけたものを一詰めのえるとなお珍味である。

その二　馬令薯

一道河内にわたる山行の終りを示す頃になると、めほしのものは皆平らげて一まゝ、誰のリッソの底をさぐって見ても、二、三ヶのじやがいもが顔を出すだけとなる。

「何んだ、じゃがいもだけか」

と馬力のおとろえた顔をしかめていやがいもとにらめっこをして、でも始まります。こんな時次の株をものはどうだろう。

じゃがいもの皮をむいて四つ切りにして柔らくなるまでやでる。これをコッヘルのフタの上にならべて塩、こしょうとバターがマークリンを溶かしてこれに掛け、けつくまで焼く。

これを満腹するまでつの込んで見給え、又もやそこにはエネルギッシュな人向が再現するだろう。

(註) マカロニ料理はもう沢山だ。

マカロニ嫌いの男より

後

最
巒

鳥本 健次



のて自今、杵木等を肺に挿入しておらずで
ある。見舞に来られた人の軽、足取りにすり、透視の
眼でかゝる知人等、我姿をそそり丁寧す、いわ
き精だった。

手術の結果は今とすろと成功たつたが、何となく
外科どつものは一歩くつくるものだ。傷が直つても、
膝にマッサージをほのた肩位上肢が全然曲りにくくな
ってしまった。マッサージで膝を屈折するには、全く痛
いものだ。無理に曲げるのだから、当時のへ枝は

廊下行く人の足音聞くにつり

意のひとゆかぬ我の足うららし

十二月廿日まで大病院に居り、後はよりその
結果でどこ元にするかどうかわからぬと、さすがに肺の
診断、幸い伊東の温泉病院に知人が居り、その
方面に紹介してもら、廿五日、転院した。

当時はまだ大病院の窓口も多く一日中暗い
六人部屋、精神的にすこやかで居つたので南国

伊東に移つたのは非常によかった。

伊東は何しろ暖かい。温泉につかり、マッサージを
受けた。全然しつこく、よく、言ふてうつた人々
はケイキのうで元気な顔にも救われた。

溪核会の諸姉兄が結束して和やかな中に集まると、
度賀にたえなべ、永浦、商山、志部、創設
の一員として全然かえてもらつて、る。然い私は不幸にして
今後諸君の行く所は決して金る事が出来ないことを非
常に残念に思つた。

肺干仕事干、庭車を運転、京浜周辺でバスと衝突
し右膝関節を打撲、その結果一週間以上と半
ヶ月板損傷と見て、膝関節内に見る軟骨が取れたり、
當時は一歩も歩けず膝関節を三ヶ月ほどから手術
してとつて一月つた。

それから半年間、病院生活を送り、床の苦痛を
十二分に味わつた。エドレ松葉杖ですこやかに行ける
身は今まで大変だっただけどそのかわりには格別、当
時日下共に来ると思つたことすらあり、病院の壁を見つ

伊東でとうく年を越した。患者同志集まつ
合ひたが、再起を誓つた事は今となっては良と思
ふと分つた。

除夜の鐘となり、本年は萬がつ年と號した。

同室の日本鋼管で外傷を受けた人が初詣に行
きと云つた。全にしろ患者であり、鍾が付けては
かううで病院で許しが出るわけがない。そこで夜勤
の看護婦さんを引はり出して、病院から程近い山
にあら神社に詣でた。

そこは階段が百段近くあり、こちらは松葉杖、
又遠歩きも殆んどしかつたので、その苦痛は何う

大変だった。

一段、く肺の下と腕に力を入れて登つた。看護
婦さんも電灯を足下に照らし後でさ、こうようだ
し、笑ひた。何度も休んだ事なく、これは南アルバス、北
ア、バス、丹波、富士、富士等登つた高等学校當時
よりも苦しいものだった。

今後諸君のように健康的に山に登つ事は出来ない
筈ながら山を愛し、諸君と共に進み度ど思つて、
る。更には初詣が私の最後の登つとなつたのである。
今後の諸君の結果と今後の發展を祈る。私も今の一
員として援助は惜しまないつもりである。

足音も聞こえぬ今年、今年

一段くと上ううちに目はくらむ、のどは乾くて口方

全かつたが、我慢して全部登り切つた。そこで飲んだ水
は又特別であつた。

黒いをあたかも山の頂上を極めた快感にも勝る思
ひで見つめた。不當に良く食つたものだ。神社にたま
る気持ち更にいい。少し新年にさうの初詣、そ
で今後の近いは入京したものである。今度は当夜の事が
目に浮ぶ。

以後治療、草念、膝も西立つくなり、一月、二
月、三月、四月、五月、六月、七月、八月、九月、十月、十一月、十二月、正月、二月、三月、四月、五月、六月、七
月の会社で働いてる。トクシナガラ、川、同僚の、マニ
タの役目で下り段階をかきひで左脚が痛がな、右脚
又土木を行かず、階段を上り下りにも支障がありま
しない仕事はアスクルアーフ全うで、皆にまけずにや
つていろ。

植木をかきし玄関先の椿が全

谷川岳合宿も済んで本会の山行も

一段落しました。

毎号全報の送付、深く感謝致します。今後ともよろしく。

代表者 辻勝四郎

殿

さて本号から山岳書紹介と山と動物が一枚加わりました。山岳書紹介で読書欲をあはうれた人は本の弁借方をM.Y氏まで申越下さい。

山と動物はいつもながらのK.T先生らしく少々豊かなようです。

音楽慢歩は今回は山とは少々薄れてしまうです。
カッパ陸上ると言つたところですが、一部を

今回も山行報告が過半を占めましたが、一部を除いて皆要領よくまとめて大いに結構です。

本号はマスリ板が完全に磨滅して大変読づらい事になりますが、よろしく了承下さい。

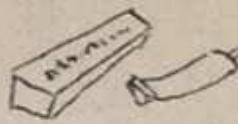
全員諸君の協力を感謝致します。

発行所	渓稜	オミヨリ
発行責任者	辻勝四郎	浦和市高砂町五十日八九
発行日	昭和三十二年五月二四日	

山に備えて

薬は神山へ

占野駅前



木造家屋は、
易々。早々と
撤去

とんかつ
市川食堂

なをしまし
うよ 村田屋



薬は
タバコ

酒、煙草は山大(ヨリ)

そばは

金田屋

(浦南通り)

なら

黒鶴屋

(競馬場通り)



山縣昌彦

溪稜山岳会
浦和市高砂町5-89